

まえがき

沖縄に通うようになってもう十数年が過ぎた。

まずは沖縄を知らなければならない。そう思って、那覇空港でレンタカーを借り、沖縄本島を一周した。普天間飛行場や嘉手納基地などの米軍基地を見た。沖縄は「基地の島」であった。首里城をはじめ座喜味城や今帰仁城、勝連城、中城城などの琉球王国関連の史跡を訪ねた。沖縄は「歴史の島」であった。斎場御嶽を訪ね、その先に久高島を眺めた時、沖縄は「祈りの島」だと思った。

北の辺戸岬では「祖国復帰闘争碑」を、南の糸満では「ひめゆりの塔」を見た。それらは訪れる者に声なき声でさらなる沖縄の姿を伝えようとしていた。

その後、先島と総称される宮古諸島と八重山諸島の島々を訪ねるようになった。宮古諸島の宮古島では仲宗根豊見親玄雅のミャーカを、多良間島では土原豊見親春源のミャーカを見た。八重山諸島の石垣島ではオヤケアカハチの騎馬像と大浜の海岸にあるアカハチが残したという伝説の「足跡」を、竹富島では西塘の墓の上に建てられた西塘御嶽を見た。これら先島の4つの島々とそれぞれの島を代表する4人の人物は、1500年、琉球王国の尚真治世下で起こった「オヤケアカハチの乱」という一本の糸で結ばれる。先島の島々もまた「歴史の島」であった。

沖縄を知る旅は現在進行形である。それが終わりのない旅であることは間違いない。沖縄はそれほどまでに広く深い対象であるとともに、沖縄を知れば知るほどさらに知りたくなるという、汲めども尽きぬ魅力を持っているからである。

本書は、そうした筆者の沖縄を知ろうとする旅の中で、その時々抱いた関心をまとめたものである。

2016年3月

著者

沖縄の歴史・政治・社会

目次

まえがき	i
第1章 沖縄諸島	1
はじめに	1	
1. 沖縄諸島の地理	3	
2. 沖縄諸島の民俗	6	
3. 沖縄諸島の歴史	9	
おわりに	11	
第2章 宮古諸島	14
はじめに	14	
1. 宮古諸島の地理	14	
2. 宮古諸島の民俗	17	
3. 宮古諸島の歴史	20	
第3章 八重山諸島	24
はじめに	24	
1. 八重山諸島の地理	24	
2. 八重山諸島の民俗	27	
3. 八重山諸島の歴史	32	
第4章 宮里栄輝に関する覚書	43
はじめに	43	
1. 沖縄県立図書館	43	
2. 終 戦	45	
3. 沖縄人連盟九州本部	47	
4. 沖縄の帰属問題	50	
おわりに	52	

第5章 戦後沖縄の政治と沖縄社会大衆党	55
はじめに	55
1. 沖縄社会大衆党の結成	56
2. 沖縄社会大衆党の性格	61
3. 沖縄の日本復帰と沖縄社会大衆党	64
おわりに	69
第6章 沖縄の記憶を語り継ぐ — 石川ジェット機墜落事故 —	76
第7章 「うちなあぐち」をめぐる諸問題	83
はじめに	83
1. 「うちなあぐち」という呼称	86
2. 「うちなあぐち」は言語か方言か	88
3. 「うちなあぐち」の教育研究活動	92
おわりに	97
第8章 服部四郎の来沖 — 『服部四郎 沖縄調査日記』を読む —	101
はじめに	101
1. 『服部四郎 沖縄調査日記』	103
2. 琉球方言研究の実践	105
3. 戦後沖縄社会の観察	110
4. 服部の残した謎	113
おわりに	115

第9章	仲宗根政善と琉球大学琉球方言研究クラブ	118
	はじめに	118
	1. 仲宗根政善	119
	2. 国語学概論	122
	3. 服部四郎の来沖	125
	4. 琉球方言研究クラブ	129
	おわりに	133
第10章	仲宗根政善生誕百年を迎えて	136
	はじめに	136
	1. 今帰仁方言研究	138
	2. 『仲宗根政善言語資料』	141
	おわりに	145
第11章	沖縄を生きた糸満女性 照屋敏子	148
	はじめに	148
	1. 越境する沖縄女性	150
	2. イチマンウイナグー	152
	3. 沖縄独立論への傾斜	155
	おわりに	160
第12章	瀬長 瞳、内村千尋著『生きてさえいれば』 (沖縄タイムス社、2010年)	162
第13章	与那原惠著 『首里城への坂道 鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』 (筑摩書房、2013年)	167

第14章 比屋根照夫著『戦後沖縄の精神と思想』 (明石書店、2009年)	175
第15章 仲程昌徳著 『「ひめゆり」たちの声『手記』と「日記」を読み解く』 (出版舎Mugen、2012年)	183
あとがき	193